



今週の T2 経済レポート

2021年8月13日号

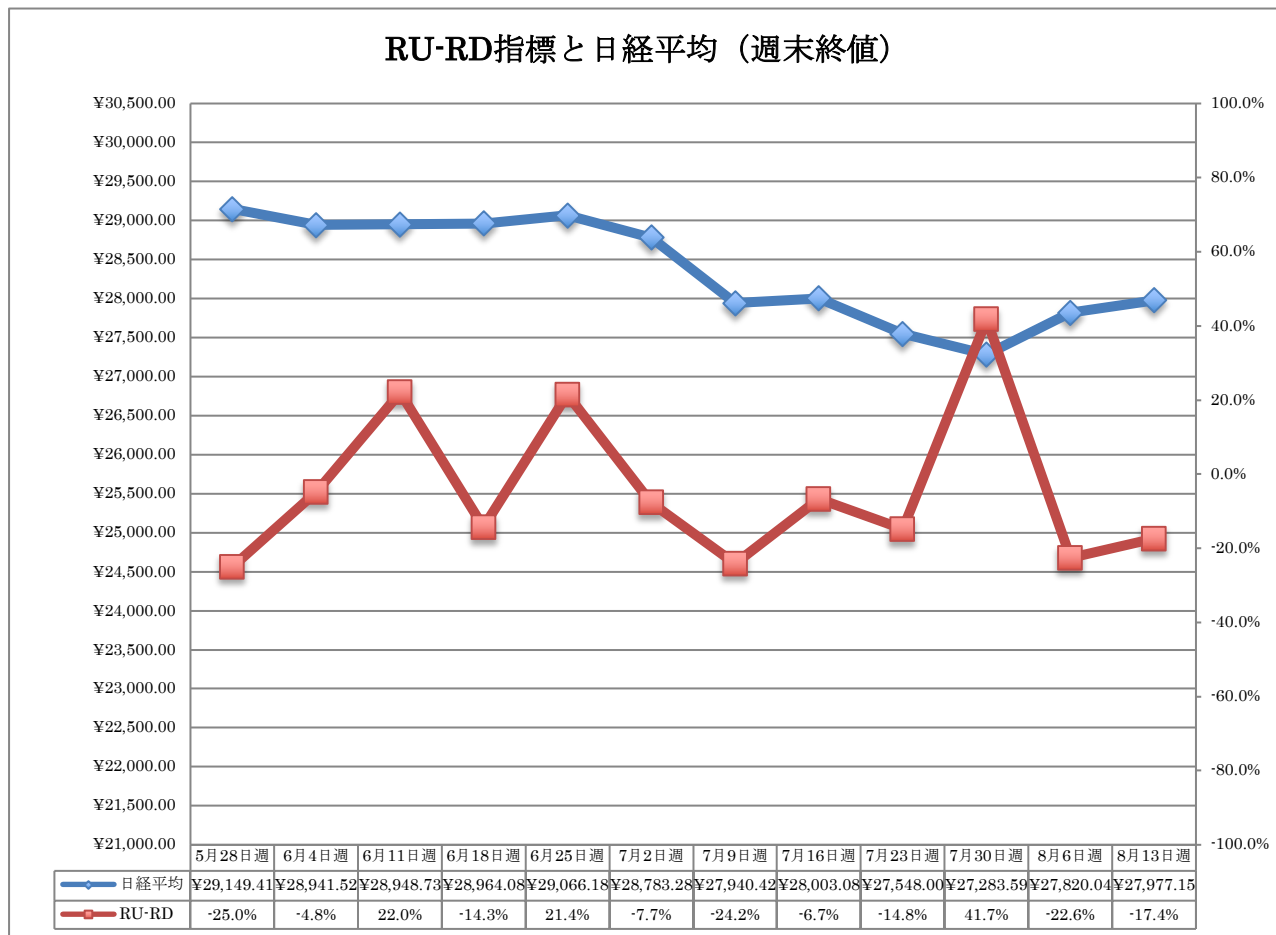
■■■ 市場ウオッチ ■■■

<先週のマーケットを振り返る>

先週、「今週は軟調な相場が予想されます。今週(8/9~8/13)の相場を占う『RU-RD 指標』の7月30日週が-17.4%と2週連続マイナス圏と、6月14日週~7月5日週の4週連続マイナス圏以来、再び方向感が出たことで軟調な相場が予想されます。先々週、『2週連続マイナス圏が継続するようですと大きく下落する可能性が出てくるため、来週と同指標は注目されます。』と指摘しましたが、それが表れたかたちです。8月13日にミニSQを控えていることから投機筋の外国人が売りを仕掛けてくる可能性もあり注意が必要です。ただ、来週(8/16~8/20)の相場を占う8月6日週が+38.8%と3週間振りにプラス圏に浮上したことで急反発が予想されます。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング1と2)」「売り(レーティング3と4)」銘柄比率』が21年6月4日週+4.9%→6月11日週+5.7%→6月18日週+7.1%→6月25日週-7.1%→7月2日週-4.3%→7月9日週-11.4%→7月16日週-2.9%→7月23日週-17.1%→7月30日週-28.6%→8月6日週+2.9%と、2月15日週68.6%をピークに7月30日週-28.6%まで下落した後、7週間振りにプラス圏に急浮上しています。これで同指標の下落が終了したのかどうかを今後、見極めなければなりません。『あくまで「-40%以下の下限ゾーン」まで下落する過程の小休止』であり、先週、指摘しました『無駄な買い支えをまだするかもしれませんが、注目は同指標が「-40%以下の下限ゾーン」にいつ陥るのかの一点に移っています。』との見方に変更ありません。

今週は、経済指標では、国内は、8月10日に7月景気ウォッチャー調査、11日に7月工作機械受注、12日に7月都心オフィス空室率、一方海外で、8月9日に中国7月消費者物価指数、中国7月生産者物価指数、10日に独8月ZEW景況感指数、11日に米7月消費者物価指数(CPI)、米7月財政収支、12日に米7月生産者物価指数(PPI)、新規失業保険申請件数、13日に7月輸入物価指数、8月ミシガン大消費者信頼感指数などが予定されています。11日発表の米7月消費者物価指数(CPI)は前年比+5.3%、同コア指数は前年比+4.3%と予想され、コア指数の上昇率は6月実績+4.5%との比較で鈍化するものの、引き続き高水準となる見通し。FRBの金融政策を見極

める上でもCPI・PPIのインフレ指標には要注目です。このほかのイベント・トピックスとしては、9日に国内市場は山の日振替休日で休場、13日に8月限オプション取引に係る特別清算指数算出(SQ)などが注目されます。」とコメントしました。



7月23日週	7月30日週	8月6日週	8月13日週
¥27,548.00	¥27,283.59	¥27,820.04	¥27,977.15
-14.8%	41.7%	-22.6%	-17.4%

先週の日経平均は、高値 28279 円(8月12日)・安値 27808 円(8月10日)と推移、2週連続で前半安・後半高の強いかたち。先週は、日本が3連休中の6日、米国で発表された7月雇用統計において非農業部門雇用者数が市場予想を上回る大きな伸びを示し労働市場の改善期待が高まった上、1兆ドル規模の超党派のインフラ投資法案が米議会上院で可決される一方、7月の米消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回ったことで連邦準備理事会(FRB)による金融緩和の早期縮小への懸念が後退、日本では13日の8月限オプション取引に係る特別清算指数算出(SQ)から上値目標値を達成、週間ベースで+157円高と2週連続で反発、心理的な節目の28000円を約1ヶ

月振りに回復して終了しています(先週予告していた上値メド 28043 円～28603 円(+2%かい離)//下値メド 27383 円～26835 円(-2%かい離))。『大台替えと時間の物理学的法則』では、小刻みの大台替えで、8月10日に28000円大台替えで仕切り直しが入りました。28500円大台替えでカウントダウンの上昇局面、逆に、27500円大台割れで下落スタートとなります。中期の大台替えでは、7月9日に28000円大台割れで下落スタートとなりました。27000円大台割れでカウントダウンの下落局面、逆に、29000円大台替えで仕切り直しが入ります。また長期の方向を示す月ベースの大台替えの法則では、7月に28000円大台割れで下落スタートとなりました。27000円大台割れでカウントダウンの下落局面、逆に、29000円大台替えで仕切り直しが入ります。これで短期↑、中期↓、長期↓となり、短期と中長期の方向が逆となり、目先は乱高下の激しいかたちに変化しました。

日経平均を左右するNYダウは、高値 35610ドル(8月13日)・安値 35041ドル(8月9日)と推移、2週連続で前半安・後半高の強いかたち。先週は、雇用情勢の改善が続いていることに加え、米議会上院で8月10日に国内インフラの整備に約1兆ドル規模の投資を実行する超党派の法案が賛成多数で可決される一方、8月米ミシガン大学消費者信頼感指数速報値が約10年ぶりの低水準となり連邦準備理事会(FRB)による金融緩和の早期縮小への懸念が後退し2週連続で上値目標値目前まで上昇、週間ベースで+307ドル高と2週連続で上昇し、終値ベースで史上最高値を更新して終了しています(先週予告していた上値メド 35718 ドル～36432 ドル(+2%かい離)//下値メド 34867ドル～34169ドル(-2%かい離))。「大台替えの法則」では、短期の大台替えで、7月26日までに35500ドル大台替えでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが、実現せず時間切れ。36000ドル大台替えで仕切り直し、逆に、34500ドル大台割れで下落スタートとなります。中期の方向を示す月ベースでは、7月23日に35000ドル大台替えで仕切り直しが入りました。36000ドル大台替えでカウントダウンの上昇局面、逆に、34000ドル大台割れで下落スタートとなります。長期の方向を示す月ベースでは、7月に35000ドル大台替えで仕切り直しが入りました。36000ドル大台替えでカウントダウンの上昇局面、逆に、34000ドル大台割れで下落スタートとなります。これで短期→、中期↑、長期↑となり、中長期の強含みは変わりませんが、短期の方向感が無くなったことで、目先は乱高下しやすいかたちに変化しました。

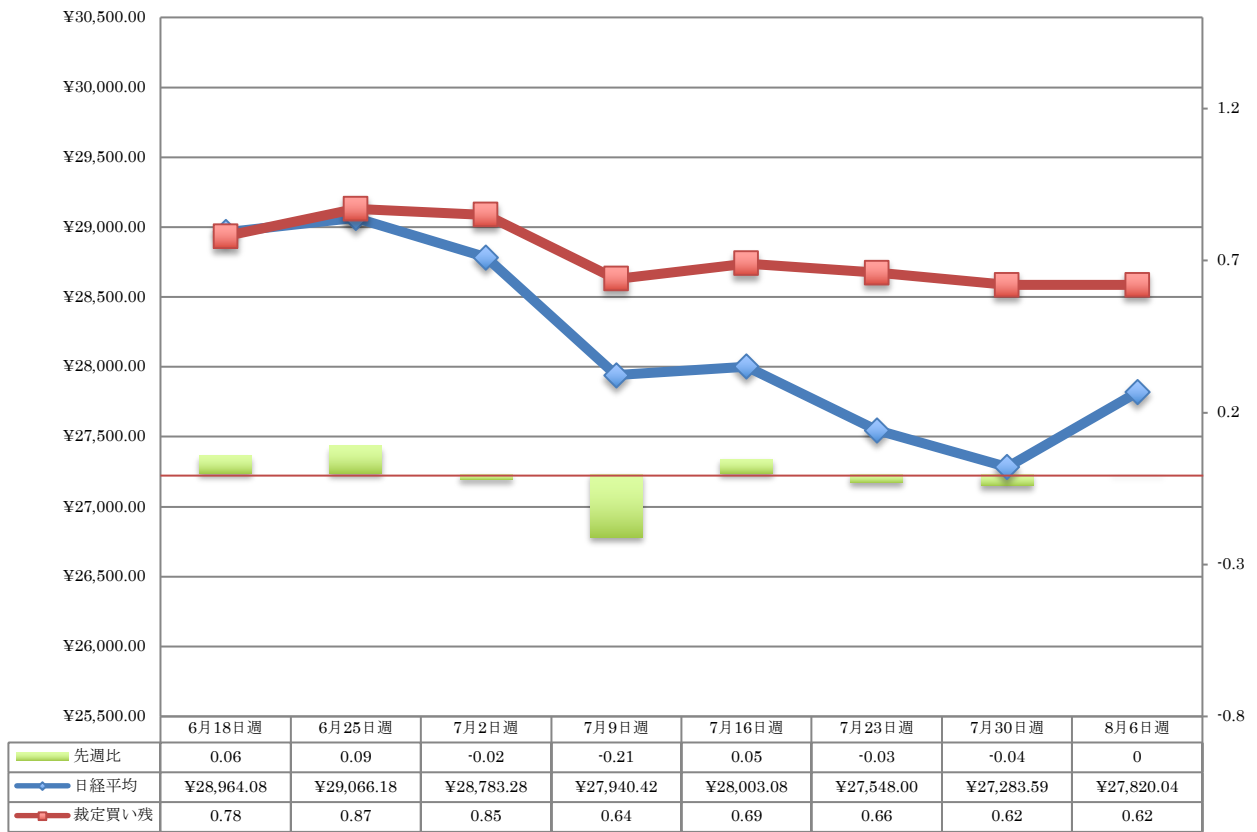
一方、為替は、ドル・円が110.79円～109.53円(先週予告していた上値メド 110.29円～111.39円(+1%かい離)//下値メド 109.01円～107.91円(-1%かい離))と推移、上値目標値を達成し、実質3週連続の円安・ドル高、ドル・ユーロは、1.1804～1.1704(先週予告していた上値メド 1.1905～1.2024(+1%かい離)//下値メド 1.1794～1.1676(-1%かい離))と推移し、下値目標値を達成し、実質2週連続のドル高・ユーロ安。また、ユーロ円は、129.83円～129.19円(先週予告していた上値メド 130.77円～132.07円(+1%かい離)//下値メド 129.42円～128.12円(-1%かい離))と推移し、下値目標値を達成し、3週間振りに円高・ユーロ安。前の週のドル>ユーロ>円からドル>円>ユーロに変化しましたが、ドル高が2週連続で継続したかたちです。ドイツの8月ZEW景気期待指

数が大きく低下する一方、米議会上院は 1 兆ドル規模のインフラ投資法案を可決し、米国景気の持続的な回復への期待が高まったことから、ユーロ売り・米ドル買い、米ドル・円の取引でもドル買いが優勢となったかたちです。

<裁定買い残・裁定売り残>

僅かながら 3 週連続で減少。5 月末以来となる 6000 億円台は依然継続しています。一時、6 週連続で 1500 億円～約 7000 億円の巨額の増減を毎週、繰り返す異常な現象が続き「ブロック取引」が行われ、ヘッジファンドなどの精算に伴う処理が行われていた可能性があります。再び、このような巨額な増減が続くようだと注意が必要です。一方、「裁定売り残」は、前の週比-516 億円の 4672 億円と 2 週連続で減少。ただ、7 月 12 日週に記録した 3000 億円台の増加は昨年コロナショック直後に表れた 20 年 4 月 13 日週+3418 億円以来の急増であり、今後、裁定売りが増える大きな転換点として注目。昨年コロナショック以降、「裁定売り残」の縮小と日経平均は連動していることから、いつ本格的な売り崩しに進むのかを見極めることが重要になってきています。「裁定買い残」の推移を振り返ると、18 年 9 月 14 日週～28 日週の 3 週間合計で+1.12 兆円の急増となり、18 年 5 月 21 日週以来、約 4 ヶ月振りに 2 兆 5000 円億円台を回復して 18 年 10 月 2 日の日経平均の年初来高値更新を演出。その後、18 年 10 月 1 日週～10 月 26 日週の 4 週連続減少、4 週間合計で約 1.5 兆円急減、この 4 週間のうち 1 週間は 5000 億円と 18 年 2 月 5 日週以来の急減で、やはり 18 年 10 月からの暴落は「VIX ショック」と同様、投機筋の外国人の売り仕掛けだったことを証明しています。

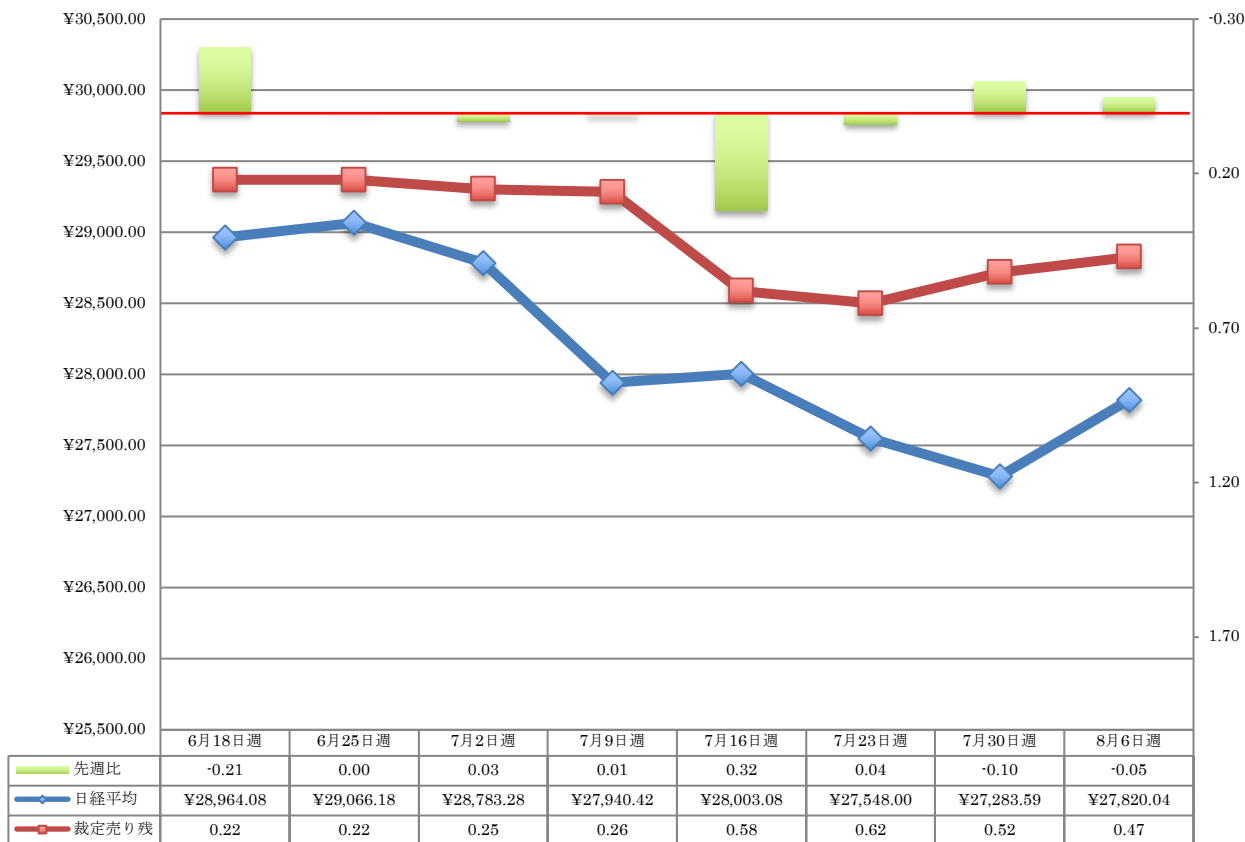
裁定買い残と先週比



7月16日週	7月23日週	7月30日週	8月6日週
¥28,003.08	¥27,548.00	¥27,283.59	¥27,820.04
0.69	0.66	0.62	0.62
0.05	-0.03	-0.04	0.00

単位:兆円

裁定売り残と先週比



7月16日週	7月23日週	7月30日週	8月6日週
¥28,003.08	¥27,548.00	¥27,283.59	¥27,820.04
0.58	0.62	0.52	0.47
0.32	0.04	-0.10	-0.05

単位:兆円

<今週のマーケットの見通し>

今週は本来であれば急反発が予想されますが、調整すべき過去2週間に逆に、上昇したことでその可能性は小さくなったと予想されます。今週(8/16~8/20)の相場を占う『RU-RD 指標』の8月6日週が+38.8%と3週間振りにプラス圏に浮上したことで本来であれば急反発が予想されます。ただ、前の週まで2週連続マイナス圏と、6月14日週~7月5日週の4週連続マイナス圏以来、再び方向感が出たにも関わらず逆に、2週連続反発となったことで急反発の可能性は小さくなったと予想されます。8月13日のミニSQに絡んで投機筋の外国人が売り仕掛けではなく、今回は逆に、買い支えを行って株価操縦をした可能性があります。来週(8/23~8/27)の相場を占う8月13日週が-5.9%と前の週と異なり、マイナス圏に陥ったことで本来は急落調整となりますが、むしろここ3週間、プラス圏、マイナス圏を毎週繰り返し、再び、方向感がなくなったかたちです。今年はこのような方向感のない局面が多々表れるのも特徴ですが、それだけ無駄な買い支えが頻繁に行われている証拠ともいえます。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング1と2)」-「売り(レーティング3と4)」銘柄比率』が21年6月4日週+4.9%→6月11日週+5.7%→6月18日週+7.1%→6月25日週-7.1%→7月2日週-4.3%→7月9日週-11.4%→7月16日週-2.9%→7月23日週-17.1%→7月30日週-28.6%→8月6日週+2.9%→8月13日週+4.3%と、2月15日週68.6%をピークに7月30日週-28.6%まで下落した後、2週連続でプラス圏に浮上しています。これで同指標の下落は終了したのかどうかを見極めなければなりません。『あくまで「-40%以下」の下限ゾーン」まで下落する過程の小休止』であり、先々週も指摘したように『無駄な買い支えをまだするかもしれませんが、注目は同指標が「-40%以下」の下限ゾーン」にいつ陥るのかの一点に移っています。』との見方に変更はありません。

今週は、経済指標では、国内は、16日に4-6月期GDP速報値、18日に6月機械受注、7月貿易収支、19日に7月首都圏マンション発売、20日に7月全国消費者物価指数、一方海外で、16日に中国7月鉱工業生産、中国7月小売売上高、米8月ニューヨーク連銀景気指数、17日に米7月小売売上高、米7月鉱工業生産、18日に米7月住宅着工件数、19日に新規失業保険申請件数、米8月フィラデルフィア連銀景気指数、などが予定されています。17日発表の7月小売売上高は前月比-0.2%と、6月の+0.6%から失速する見通しで、個人消費の弱さが意識されるかもしれません。このほかのイベント・トピックスとしては、18日にFRBは7月FOMCの議事録を公表する予定。FRBはこの会合で、市場の予想通り、FF金利誘導目標を0.00-0.25%に据え置き、米国債の保有を少なくとも月800億ドル、住宅ローン担保証券(MBS)を少なくとも月400億ドルそれぞれ増やす量的金融緩和策を維持しました。声明では、一過性要因でインフレが上昇していると繰り返し、経済や雇用活動は目標達成に向けて一段と前進したと判断を引き上げましたが、仮に議事録で引き締め姿勢がより顕著になればジャクソンホール会合に向け市場は神経質な動きとなるため注目されます。

RU-RD指標と日経平均（週末終値）



8月6日週	8月13日週	8月20日週	8月27日週
¥27,820.04	¥27,977.15		
-22.60%	-17.40%	38.80%	-5.90%

■■■ 今週の各指標の上値・下値メモ ■■■

<日経平均>

上値メモ 28359 円～28926 円 (+2%かい離)

下値メモ 27770 円～27214 円 (-2%かい離)

<NY ダウ>

上値メモ 35516 ドル～36226 ドル (+2%かい離)

下値メモ 35095 ドル～34391 ドル (-2%かい離)

<ドル円>

上値メモ 110.66 円～111.76 円 (+1%かい離)

下値メモ 109.23 円～108.13 円 (-1%かい離)

<ドルユーロ>

上値メモ 1.1822～1.1940 (+1%かい離)

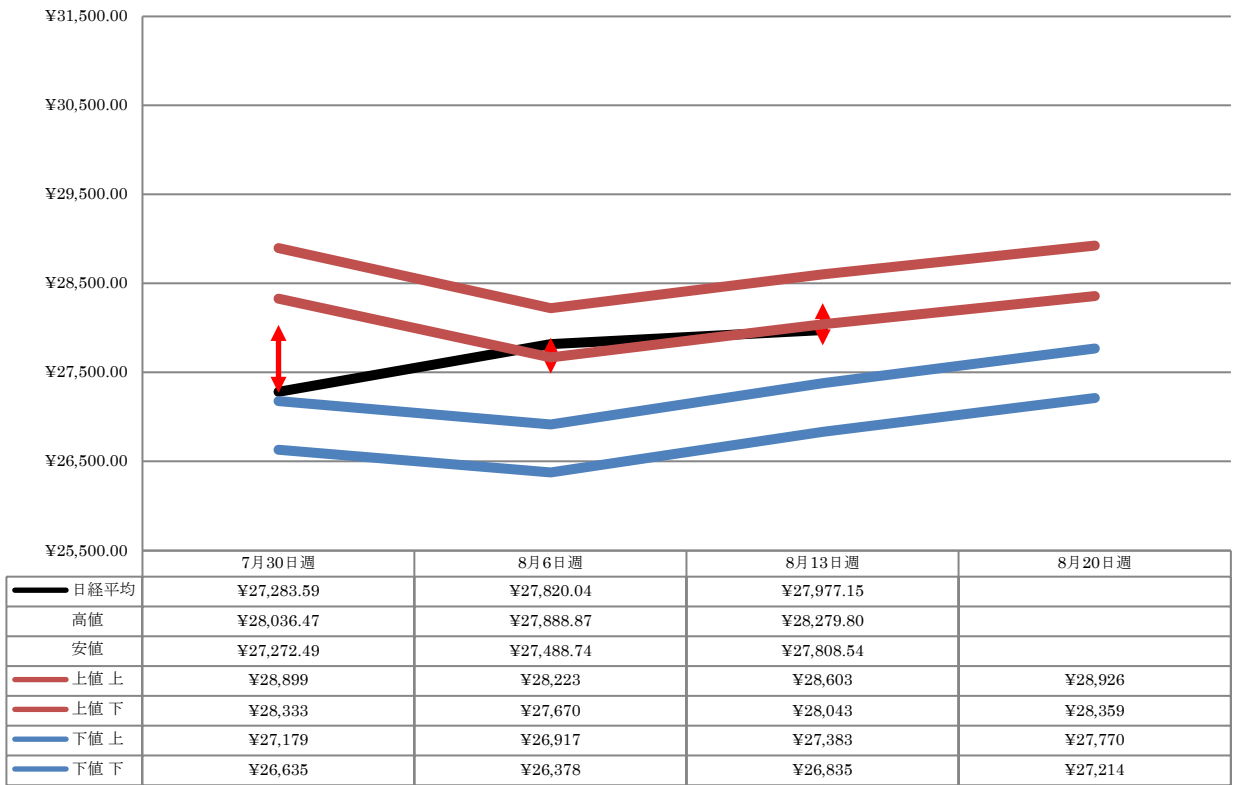
下値メモ 1.1676～1.1559 (-1%かい離)

<ユーロ円>

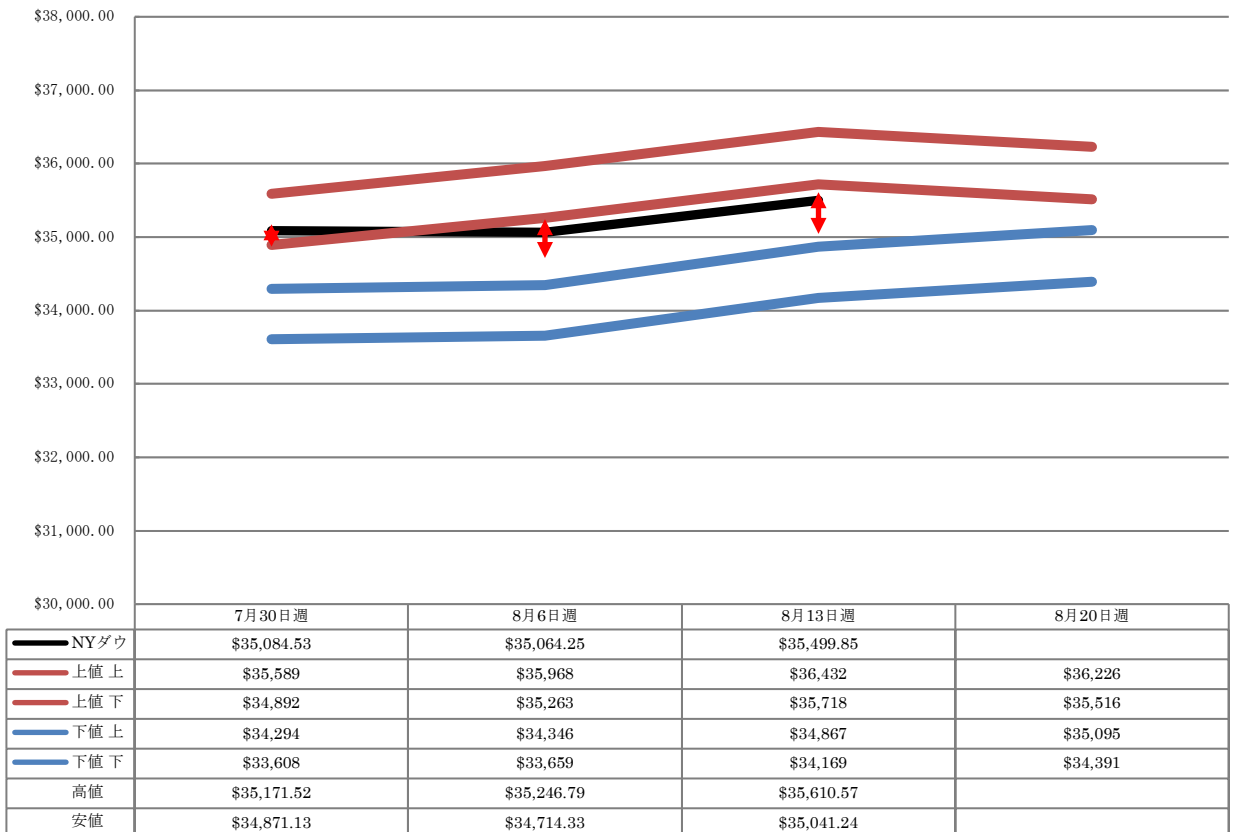
上値メモ 129.97 円～131.26 円 (+1%かい離)

下値メモ 128.79 円～127.50 円 (-1%かい離)

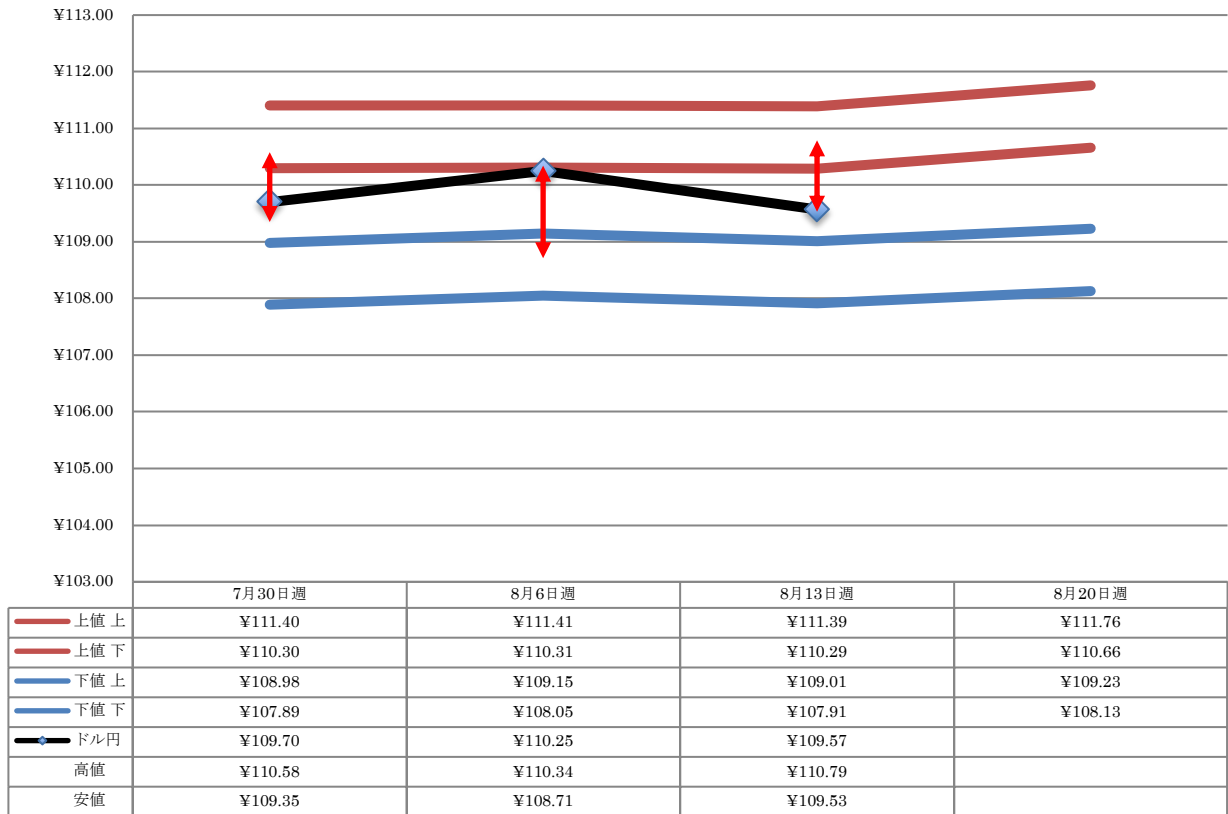
日経平均



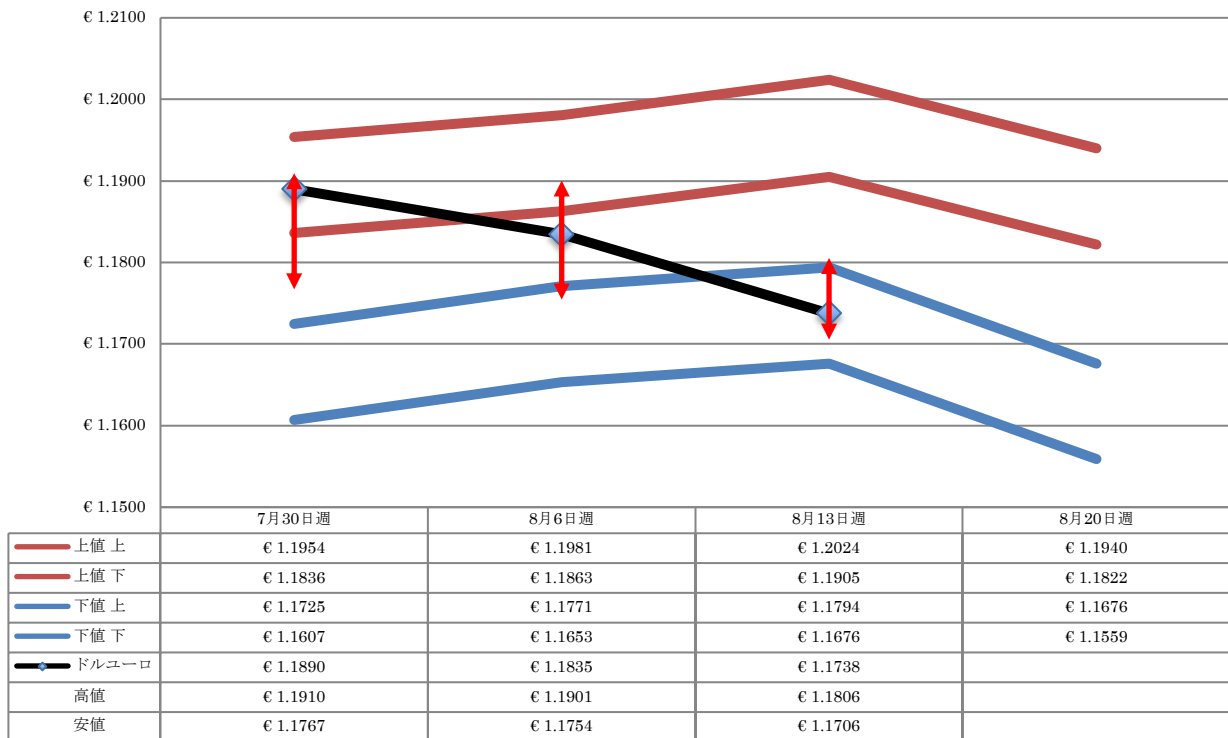
NYダウ



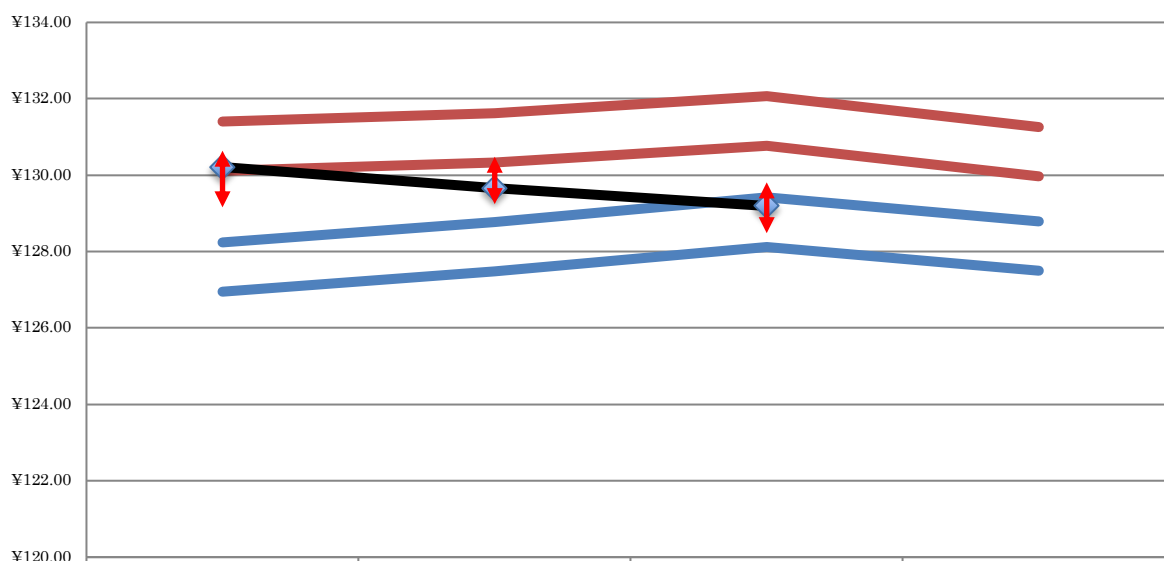
ドル円



ドルユーロ



ユーロ円

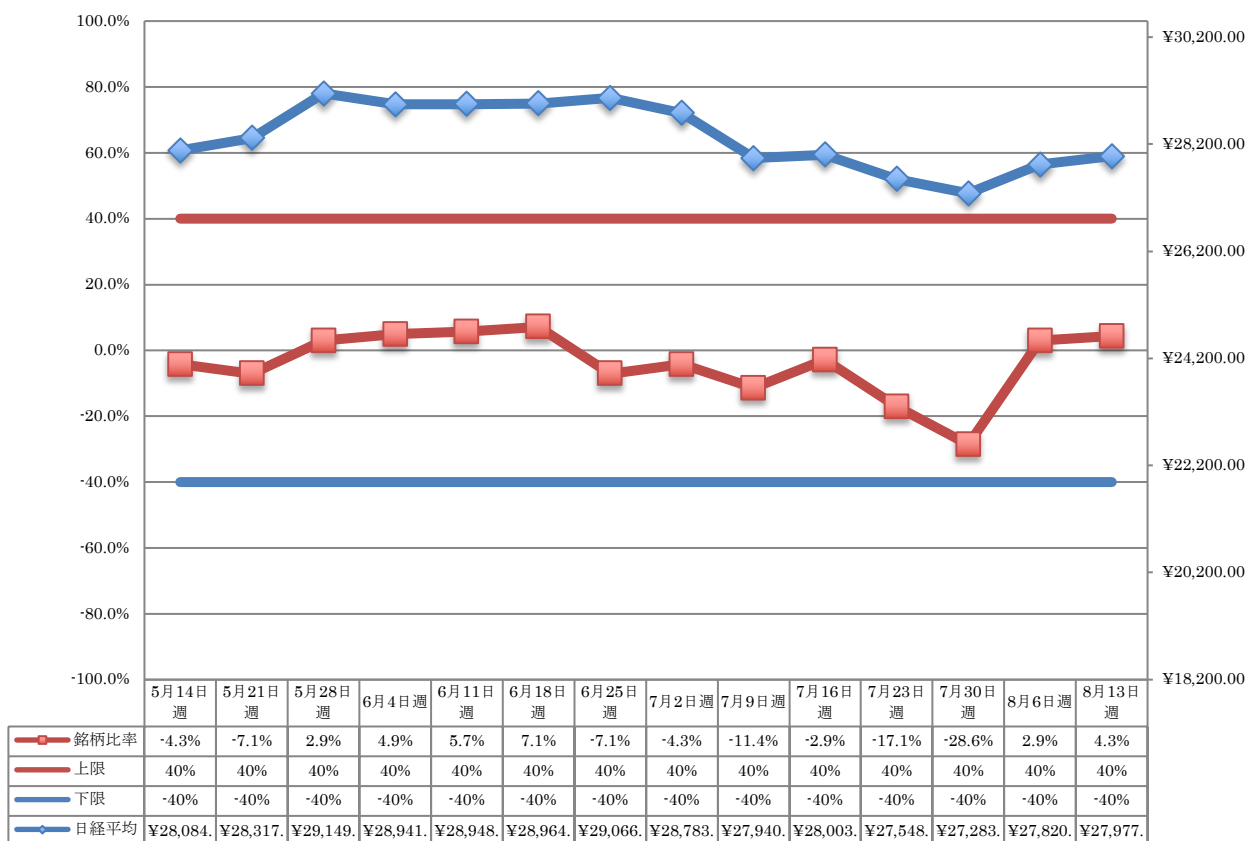


	7月30日週	8月6日週	8月13日週	8月20日週
上値上	¥131.41	¥131.63	¥132.07	¥131.26
上値下	¥130.11	¥130.33	¥130.77	¥129.97
下値上	¥128.24	¥128.77	¥129.42	¥128.79
下値下	¥126.95	¥127.48	¥128.12	¥127.50
ユーロ円	¥130.21	¥129.65	¥129.19	
高値	¥130.64	¥130.48	¥129.82	
安値	¥129.17	¥129.23	¥128.48	

■■■ レーティング変更 ■■■

同指標は日経平均に多少先行しますが一致指標。同指標は、21年6月4日週+4.9%→6月11日週+5.7%→6月18日週+7.1%→6月25日週-7.1%→7月2日週-4.3%→7月9日週-11.4%→7月16日週-2.9%→7月23日週-17.1%→7月30日週-28.6%→8月6日週+2.9%→8月13日週+4.3%と、2月15日週68.6%をピークに7月30日週-28.6%まで下落した後、2週連続でプラス圏に浮上しています。これで同指標の下落は終了したのかどうかを見極めなければなりません。『あくまで「-40%以下の下限ゾーン」まで下落する過程の小休止』であり、先々週も指摘したように『無駄な買い支えをまだするかもしれませんが、注目は同指標が「-40%以下の下限ゾーン」にいつ陥るのかの一点に移っています。』との見方に変更はありません。

日経平均とT2レーティング比率



□発行元:塚澤.com 運営事務局

□ご意見・ご感想:info@tsukazawa.com

※免責事項※

「塚澤.com 今週の T2経済レポート」は、

株式会社ライブグラフィー(以下、当社)が提供するレポートです。

これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いかねます。

提供する全ての情報について、当社の許可なく転用・販売することを禁じます。